



人は集まる。でも、ちゃんとつながるかな？

続けたい。でも、このやり方、限界かも～！



「みんな」って言うけど、みんなって誰？



それ、もしかしたら、 アートプロジェクトの 出番かも？



さまざまなお悩みを“関係性”から見直す事例集



うちのまち、ほんとに何も無いのかな？

そもそも、なんでこれやってるんだっけ？



人のつながりづくりって、何からはじめたらいいんだろう？

それ、もしかしたら、
アートプロジェクトの
出番かも？

さまざまなお悩みを
“関係性”から見直す事例集

編著：東京アートポイント計画

はじめに

その悩み、“関係づくり”で見直してみませんか？

「東京アートポイント計画」では、2009年より、
地域で活動するNPOや団体とともに、まちのなかに、
人と人が出会える場（アートポイント※）を育んできました。

※アートプロジェクトが継続して動き続ける“関係の拠点”のこと。アーティスト、運営者、ボランティア、地域の参加者など、多様な人々がかかわり、その場自体が次の活動を生んでいる。

そこで、大切にしてきたのは、
「当たり前を問い直す」「課題を見つける」「異なる分野をつなぐ」
といったアートならではの視点です。

「そんなことやっちゃうの？」「え、そこで？」「それもアリ？」
そんなおどろきを伴う、ユニークで実験的なアートプロジェクトから、
人と人との関係が生まれ、地域に創造的な活動が育っていく。
そうした現場を、これまで何度も目にしてきました。

ここ数年は、区市町村との連携事業を実施するなかで、
新たな事業づくりや市民協働に奔走する自治体職員、
孤立防止・居場所づくりに取り組む福祉関係の方々、
空き家・空き倉庫の利活用に悩む不動産の担当者など、
これまでアートプロジェクトとは縁がなかった方々と、
出会い、対話をする機会が増えてきました。

「運営する文化施設に、こどもが来てくれない」
「空きスペースをどう使えばいいかわからない」
「高齢者や障害のある人が集まれる場がない」
「せっかくはじめたイベントが続かない」
「人と人がつながるコミュニティがつかれない」

そこで語られる困りごとを、一つひとつ丁寧にひもとくと、
“関係が生まれる入り口がない”という共通の課題に行きつきます。

そこで、
アートを「関係をつくるための行為」として捉えてみる。
すると、従来とは異なる視点やアプローチがひらけるのではないか。
この気づきが、本書の出発点です。

本書では、
この視点をより具体的な事例に落とし込みながら、
地域の現場に向き合うみなさんと一緒に、
「どうすれば人がかかわりはじめる場を生み出せるか」
について考えていきます。

アートに関する特別な専門知識は必要ありません。
さまざまなアートプロジェクトの実践例を通して、
地域に“関係の種”をまくためのヒントをお届けできたら幸いです。

はじめに

その悩み、“関係づくり”で見直してみませんか？ 3

1

ひとが集まる入り口をつくろう

- TOPIC 1 「思い出、聞かせてください」からはじめてみよう！ 12
8ミリフィルム鑑賞会／とある窓／pen友プロジェクト
- TOPIC 2 “得意”と“興味”を持ち寄ってみよう！ 18
かえっこ／とくいの銀行／織物BAR／レコメン堂
- TOPIC 3 “お祭り”で、非日常の力を生み出そう！ 25
エレグトロニコス・ファンタスティコス！／キタ！千住の1010人

2

関係の“地図”を描き直そう

- TOPIC 4 “ともに歩くこと”から、はじめよう！ 34
国分寺の〇〇さがし／想起の遠足／吉島・ピアノ・レッスン・コンサート
- TOPIC 5 行政の部署の“あいだ”をのぞいてみよう！ 40
ラジオ下神白／GREEN GREETINGS／
社会福祉法人興望館リサーチ&展覧会
- TOPIC 6 “みんな”って誰のこと？ 46
めとてラボ／KINOミーティング／映像メモリーちゃんぼんクラブ

3

もっと仲間を増やそう

- TOPIC 7 記録や発信も、ともに楽しく！ 56
ファンファンレター／おとのふね／ART BRIDGE
- TOPIC 8 点在する活動をつないでみよう！ 62
墨東まち見世&まちみてマップ／Kunitachi Art Center／
SUPER OPEN STUDIO(S.O.S.)
- TOPIC 9 チームができると、活動が広がる！ 68
大巻電機K.K.／テラッコ／のと部

おわりに

悩みは続くよ、どこまでも 75

アートプロジェクトについてもっと知りたい人へ 78

1

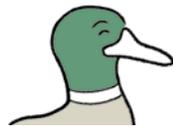
ひとが集まる 入り口をつくろう

団地や都市開発を行う会社で、
これからの団地のあり方を考える千葉さん



アートプロジェクトに可能性を感じているけれど、
何からはじめればよいのか悩んでいるようです。

登場人物紹介



カモさん

アートプロジェクトの現場に詳しい
プログラムオフィサーのような存在



千葉さん

団地や都市開発を
行う会社で働く30代



田中さん

郊外にある市役所の
文化振興課で働く20代



新藤さん夫妻

アート活動の普及団体に
所属する40代半ばの夫婦

本書は、東京アートポイント計画の専門スタッフ（プログラムオフィサー）の実体験から生まれたフィクションです。新たな事業づくりや市民協働に奔走する自治体職員、孤立防止や居場所づくりに取り組む福祉関係の方々、空き家・空きスペースの利活用に悩む不動産担当者、アート活動に取り組むNPOや団体など——さまざまな人々の声をもとに構成しました。

団地でのコミュニティづくりに奮闘中。
アートプロジェクトにも興味あるけど、
何からはじめたらいいんだろう……？

千葉さん

- ・団地や都市開発を行う会社で働く30代
- ・大学時代は建築や都市計画を学び、都市開発に携わる仕事がしたい！と入社
- ・勤続8年、ほぼ2年おきに部署異動がある



千葉さんの職場は、
全国各地で大規模な都市開発を
手がけてきた実績ある会社。

千葉さんは現在、団地の共用部を、
どう活用するかを企画する部署に所属。
“これからの団地”を考えるなかで、



戦後、同社が開発を
進めてきた団地の多くは、
ここ数年、建て替えの
時期を迎えている。



「コミュニティ」
「交流」
がキーワードと
なっている。

有識者を迎えた委員会をひらくと……

耳に
タコ…

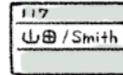
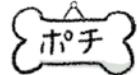
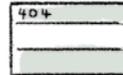
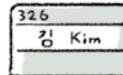
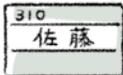
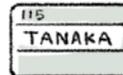
これからの団地には、
コミュニティ交流の
機能が必須！

同意

Do it.

と口々に言われる。

また、
団地住民の高齢化・多国籍化に伴い、
幅広い世代や多様なルーツをもつ人たちの
交流が必要とも……。



でも、会社のミッションは、
住まいを建て、家賃を設定し、
その収入で事業をまわすこと。

交流が大切なのは、わかっている。
でも正直に言えば、何から手をつけて、
どのように進めればいいのかが見えない。



交流づくりのプログラムや
運営のノウハウは、社内にほとんどない。



何からはじめたら……？



千葉さん

この前、まちとアートがテーマのトークを聞いて、
アートには可能性がありそうだなと思いました。
でも……、いざ自分の仕事となると、
何からはじめたらいいのかわからなくて。

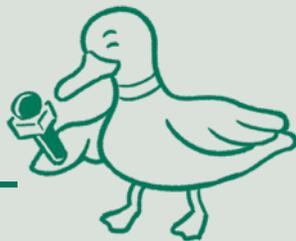


カモさん

なるほど。人が集まるきっかけづくりには、
こんな視点がヒントになるかもしれません！

TOPIC 1

「思い出、聞かせてください」から はじめてみよう！



千葉さん

でも、地域の人たちの交流が目的でも、
面と向かって「交流しましょう！」と話すのは照れくさいなあ。



カモさん

そうですね！ そんなとき、その土地の歴史や
誰かの人生の話って、会話のいい糸口になるんですよ。



千葉さん

たしかに土地の歴史や昔話って、誰にとっても
身近な話題だけど、意外と知らないことが多いかも。



カモさん

「歴史を調べること」「誰かの思い出を聞くこと」は、
実は、コミュニティを育むことと相性がいいんです。
映像や写真、音楽や絵など、表現や記録を“あいだ”に介すと、
記憶を引き出すためのいい呼び水にもなるんですよ！

AHA![Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]による

8ミリフィルム鑑賞会



写真提供：公益財団法人せたがや文化財団 新生活工房

市井の人々の記録に潜む価値に着目したアーカイブづくりを行うプロジェクト、AHA!では、収集・保存・公開・活用という活動のプロセスのなかで、8ミリフィルムの鑑賞会をひらいている。上映フィルムは、その土地に住む人々から集めたもの。さまざまな年代の人が集まり、見知らぬ家族のホームムービーを眺めていると、「あれはね……」「この頃はさ……」と言葉が引き出される。フィルムの持ち主が思い出を語り出したり、そこからまた別の人の記憶が引き出されたりと、話題は映像から離れて思いがけない方向へ広がっていく。映像を囲んで話す——それだけで、互いを知らない人同士でも、記憶を共有しながら自然と打ち解け合う回路が立ち上がる。

いつ

2008年～

どこで

大阪、東京、水戸、岐阜ほか
全国各地

#映像 #少人数 #見る
#語り合う #記憶 #数時間
#昭和を知っている世代



昭和の映像を囲んで
語り合う場をつくる



窓の風景を“聞く”ことが
声をかけるきっかけになる

一般社団法人NOOKによる とある窓



撮影：森田風海

「とある窓」は、土地と協働しながら記録をつくるコレクティブ・NOOKが行うプロジェクト。「あなたのお気に入りの窓から見える風景について教えてください」と問いかけ、まちの人々の聞き書きをまとめる取り組みだ。ある団地で行ったときには、聞き手を公募したところ、定員4名の枠を大きく超える約30名の応募が集まった。聞き手は団地の住民や近隣のカフェ店主など、自分で探した相手のもとへ話を聞きに行く。聞き取った内容はテキストに起こし、本人確認を経て、小さな本へと編集する。完成した本は、窓の写真とともに団地内の拠点で展示された。展示をきっかけに自身の思い出を語り出す人も多く、取材相手とは、日常的に声をかけ合うような関係が育っていった。

いつ
2018年～

どこで
仙台、東京、能登

#聞き書き #住まい #写真
#本 #展覧会 #記憶
#数か月 #誰でも聞き手になれる

呉夏枝+市民スタッフによる

pen友プロジェクト



織りや染め、ほどくなど、繊維素材にまつわる技法を用いた作品を手がけ、個人の記憶の継承のあり方を探求する美術家の呉夏枝さん。オーストラリア在住の呉さんが、外国にルーツをもつ方との文通をきっかけに行った「pen友プロジェクト」は、参加者が「おばあさんの記憶」についてノートに綴り回覧し、記憶を共有するプロジェクト。記録メディアを介することで、遠く離れていたり、集まって話すことが難しかったりする人とも、継続的なやりとりを重ねることができた、コロナ禍でのプロジェクトだった。最終的には展覧会として発表され、「こんな経験をした人が、同じ地域に住んでいたなんて」と、普段は出会いにくい誰かの経験を、地域で共有する機会にもなっていた。

いつ
2020年

どこで
東京

#交換日記 #展覧会
#おばあさん #海外ルーツ
#多世代の記憶継承
#国境を越えた出会い



手紙とノートを通して
離れた人と記憶を交換する

思い出は、交流の入り口になる！

人には、生きてきた年月の分だけドラマがある。

「思い出、聞かせてください」と声をかけることは、相手のことを知る、ちょっとした切り口になります。一人ひとりの経験に耳を傾けることで、自然と深いコミュニケーションが生まれていく。

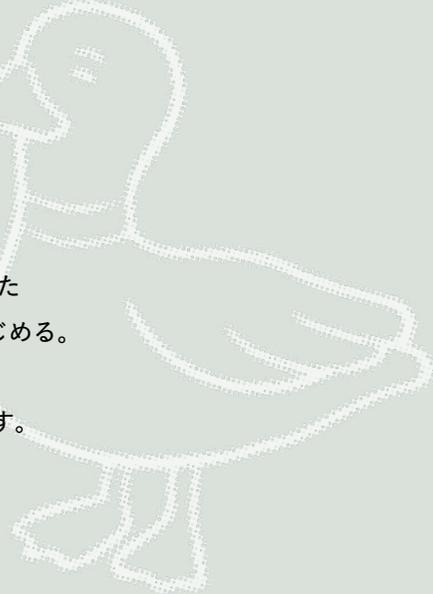
「こんなことがあった」「昔はこんな場所だった」といった想いに触れると、その記憶をどう引き継ぐかを考えはじめる。すると、やがてほかの人に話を聞きに行ったり、新しい伝え方を試したり、“続き”を動かす人が現れます。記憶は、コミュニティを育む関係づくりの、そして、次の活動を生み出す苗床にもなるんです。

実践のための

コツ

安心して話せる環境をつくること

数名から10名程度の規模感で活動することがおすすめ。誰かの話にじっくりと耳を傾げるためには、顔が見える距離で語り合うことが大切です。誰かの大事な記憶を交換し合う作業でもあるため、あまり気を張りすぎず、楽しみながら取り組むこと。それでいて、そっと触れるような丁寧さがあると、なおよいでしょう。



主体的に、自律的に運営していくには……？



アートと聞くと、空き店舗の壁に壁画を描いたり、ギャラリーのように真っ白い壁を立てて展示をしたり、空き地に組み立てたステージでダンスや演劇をしたり……、そんなイメージを抱いていましたが、それだけじゃないんですね！



ええ、そうですね。地域の人たちが交流する場をつくることも、立派なアート活動の一つです。



高齢化は、団地が抱える課題の一つでもあるので、紹介していただいた事例は、相性がよさそうです！ただ、会社としては、僕たちが主催し続けるのではなく、持続可能な仕組みづくりも求められるんですよ……。



なるほど。住民の方が動き出してくれるといいですね。

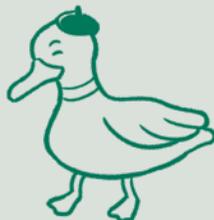


はい。住民の人たちが主体的に、そして、自律的に運営していくことができれば理想的だなと思います。でも……、本当にそんなことができるのかなって。



まずは、動き出すための関係を生み出せるといいかも。それでは、こんなプロジェクトはいかがでしょう？

“得意”と“興味”を 持ち寄ってみよう！



カモさん

アートは、新しい表現を生み出すだけでなく、“すでに地域にあるもの”を集めて、編み直すことで、人が動き出す交流の“仕組み”をつくることもできるんです。



千葉さん

すでにあるもの……、具体的にはどんなものですか？



カモさん

使われなくなったおもちゃや趣味でつくっている作品、自分の特技や得意なことなど、身近なものですね。そうしたものをつなぎ直す考え方を、美術家の藤浩志さんは、「OSのアート」と呼んでいます。



千葉さん

OSって、パソコンの？



カモさん

そうです！ ハードやアプリを動かす基本システムのように、人や場が自然と動き出すための土台＝仕組み、ですね。

藤浩志による かえっこ



写真提供：千葉国際芸術祭実行委員会
撮影：ただ（ゆかい）

作品をつくるだけでなく、人や場が動き出す仕組みを考える活動が続けてきた、美術家・藤浩志さん。「かえっこ」は、その代表的な取り組みの一つ。不要になったおもちゃを持ち寄り、子どもたちが中心となって交換の場を運営するものだ。独自通貨「かえるポイント」を使い、おもちゃを交換したり、店を立ち上げたりする。藤さんは、この場の仕組みである「kaekko」を提示したままで、必ずしもすべての現場に立ち会うわけではない。基本ルールはありつつも、活動の目的や場所、参加者に応じて運営する人たちが柔軟に内容を組み替えられる仕組みが構築されている。もともと地域で取り組んでいた活動と組み合わせるなど、各地で地域性を反映した多様な展開が生まれつつある。

いつ

2000年～

どこで

全国各地

#不要なおもちゃ #子ども
#交換 #屋外可 #大人数
#仕組みはカスタマイズ可



仕組みがあることで
こどもたちの場が動き出す



「とくい」の交換から
まちに新たな関係をつくる

深澤孝史による とくいの銀行



写真提供：取手アートプロジェクト

アーティストの深澤孝史さんが2011年から続けている「とくいの銀行」。お金の代わりに、人の「とくい」を預かり、必要ときに引き出せる仕組みで、一人ひとりの違いを価値として受け止めながら、ゆるやかに人をつないでいる。「不動産売買などの相談に乗れます」「美味しいコーヒーを淹れられます」「外国語を話せます」といった知識や技術から、「何を言われても笑って楽しく話します」のようなユニークな「とくい」まで幅も広い。身近な「とくい」を同じ地域に住む人たちと共有することで、新しい出会いのきっかけづくりにつながっていく。「とくいの銀行」という明快なネーミングの通り、仕組みもシンプルで、開業マニュアルブックを読めば誰でもひらくことができ、各地に「支店」が生まれている。

いつ

2011年～

どこで

取手、白老、シンガポール、
浜松、山口、札幌、富山、
二子玉川

#仕組みがわかりやすい #団地
#とくい #交換 #ジャンル不問
#技術不要 #誰でも参加可

久村卓による 織物BAR



撮影：高橋真美

彫刻家・美術家の久村卓さんが主宰する「織物BAR」は、手のひらサイズの織物をつくるワークショップだ。一人で黙々と作業をする人もいれば、友達とおしゃべりを楽しみながら編む人もいる。小さな子どもがいる家族は協力して織物を完成させたり、わからないことがあれば隣の人の手元をのぞいて話しかけたり。店主役の久村さんは織り方を教え、パーカウナーに並ぶ糸を手渡ししながら、参加者同士のやりとりを促していく。手を動かす作業があることで、何気ないコミュニケーションが自然と交わされるようになる。店主役は参加者やスタッフが交代で担うこともできる。そうすることで回を重ねるごとに、場が少しずつ「自分たちのもの」となっていくことも起こっていく。

いつ

2024年～

どこで

東京、横浜ほか

#手芸 #コミュニケーション
#誰でも参加できる #店主
#織物は彫刻の台座と同じ



手を動かす時間が
コミュニケーションを誘発する



一般社団法人NOOKらによる

レコメン堂



“他薦”により“表現のようなもの”を集めた展覧会「レコメン堂」。土地と協働しながら記録をつくるコレクティブ・NOOKら^{*}が編み出した、まちでおもしろい活動をしている人を「他者の推薦」によって可視化する仕組みだ。絵やスケッチ、文章、映像、つるし雛など、さまざまな人々の多様な表現が、推薦者のコメントとともに展示される。まちに点在する実践を集めて提示することで、「こんな活動をしている人がいるのか!」と、まちを捉え直す視点が立ち上がる。誰でも参加できる企画は「なんでもあり」になりかねない。「レコメン堂」には“他薦”という仕掛けがあることで、展示されるものやつくり手との関係をつくり、受け手に届く構造が丁寧に設計されているところに工夫がある。

いつ

2019年～

どこで

仙台、猪苗代

#他薦 #表現のようなもの
#地域の記録 #日常のふるまい
#展覧会
#すでにあるものを紹介する仕組み

※初めての展覧会の主催は、「やわらかな土から」(一般社団法人NOOK・3.11 オイデアアーカイブ・NPO法人エイブル・アート・ジャパン)

推薦を通して

まちの表現が浮かび上がる

1ひとが集まる入り口をつくる

TOPIC 2 まとめ

仕組みをつくるアート!

誰かの表現を一緒におもしろがったり、人が自然と動き出したくなるような仕組みを考えたり、これまで出会わなかった人同士のかかわりを生み出したり。そういう仕組みを構築する「アート」もあるんです!

「場」や「関係性」を丁寧に編んでいくこと。そこで役立つのが、アートという分野で育まれてきた、ものの見方や問いの立て方、状況を読み取る力です。

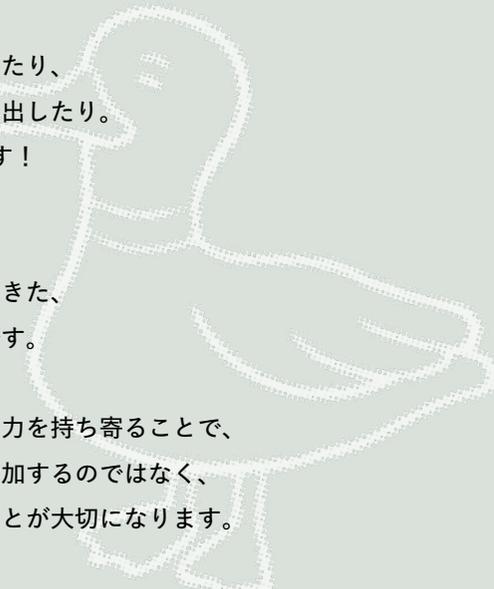
さまざまな立場や経験をもつ人たちがかかわり、力を持ち寄ることで、初めてかたちになっていく。「お客さん」として参加するのではなく、小さな役割でも、ともに担い手としてかかわることが大切になります。

実践のための



運営にも携われる体制をつくること

仕組みをつくるアートでは、「誰と一緒に取り組むか」を考えることが大事になります。ただ、必ずしも専門的な知識や技術は必要となるわけではないので、地域の人たちが運営側へ入ることもおすすめ。例えば町内会やこども会、地域で活動するさまざまな分野の人たちと連携した場づくりに挑戦してみるのもいいかもしれません。



「にぎわい」も「かかわり」も生み出したい！



千葉さん

そうそう、団地で仕事をしていても、
たまにおもしろいことをしている人に出会うんですよ。
そういう人たちを見えるようにする企画、素敵ですね！



カモさん

すでに団地に、おもしろい芽はあるんですね！
発表側でも運営側でも、いいかたちでかかわっていける
仕組みが構築できるといいですねえ。



千葉さん

まさに、「住民が主役になる」ですね。
これなら、上司のウケもよさそうだな……。



カモさん

よかった！



千葉さん

でも予算をつけて企画をすると、
参加人数や報告資料での「映え」も求められるな。
マルシェのような大きなイベントをすると、人は集まる。
でも、住民の人たちは買い物をして帰るだけで、
主体的に参加してくれるわけではないんですよ。
盛り上がりはしているけど、何かが残る感じはしなくて……。



カモさん

「にぎわい」はつくれても、「かかわり」は生まれにくいと。
それでは、こんなプロジェクトはいかがでしょう？

TOPIC 3 へつづく

TOPIC 3

“お祭り”で、
非日常の力を生み出そう！

カモさん

“みんなで盛り上がる”といえば、やっぱりお祭り！
お祭りのいいところって、ただ見ているだけじゃなくて、
自分もつくる側や演じる側になれるところだと思うんです。



千葉さん

たしかに。参加できるほうが楽しいですね。
でも、演者になるって、何か特別な技術が必要なんじゃ……。



カモさん

最近は「やってみようかな」という気持ちを大事にして、
もっと気軽にかかわれる方法をつくるアーティストもいます！



千葉さん

なるほど。ハードルを下げること、
参加できる人を増やすんですね。



カモさん

みんなで準備して、当日も一緒に動かしていく。
そうすると、「楽しかったね」だけで終わらず、
「一緒につくった仲間」という感覚が残りますよ！



身近な家電で演奏会!?
小さな祭りを育む

和田永による

エレクトロニコス・ファンタスティコス!



撮影：山本マオ

アーティスト/ミュージシャンの和田永さんを中心に展開する「エレクトロニコス・ファンタスティコス! (通称: ニコス)」は、古い家電を改造して楽器をつくり、演奏方法を編み出し、オーケストラをめざすプロジェクトだ。光や磁力をいかした家電楽器による演奏には、祭りのようににぎわいが立ち上がる。特徴的なのは、演奏当日だけでなく、準備の過程そのものがひらかれていること。楽器づくりから演奏までを担う運営チーム「ニコス・オーケストラボ」では、家電を前に知恵を出し合い、手を動かしながら試行錯誤を重ねていく。時には、専門的な技術をもつ参加者が現れ、新たな楽器が生まれることも。ラボは東京を起点に各地へ広がり、土地に根ざした小さな祭りのような実践が育っている。

いつ
2015年～

どこで

東京、日立、京都、名古屋、
秋田、福岡

#音楽 #家電 #楽器演奏
#屋内外 #ラボ #オーケストラ
#みんなで盛り上がる
#ビリビリビカビカ



だじゃれと音楽でつながる!?
参加型の大規模コンサート

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」の キタ! 千住の1010人



撮影：蓮田了平

「キタ! 千住の1010人」は、東京都足立区千住の屋外公園に1010人のパフォーマーが集った巨大演奏会だ。声や楽器に限らず、なわとびや石、スマートフォン、炊飯器など、身近なものが音として用いられ、音楽が得意か、技術があるかにかかわらず、一人ひとりの個性が「共存」する不思議な参加型アンサンブルが生まれた。作曲家・野村誠さんが2011年からディレクターを務める「千住だじゃれ音楽祭」の一環として開催されており、名称の「キタ! 千住」と「1010人」もだじゃれから生まれたもの。活動は市民有志による音楽団体「だじゃれ音楽研究会」に支えられ、研究会では親しみやすい入り口としてのだじゃれから、新しい作曲方法「だじゃれ音楽」を探求している。

いつ
2025年

どこで

東京

#だじゃれ音楽 #大人数
#誰でも参加可 #技術不要
#お祭り #みんなで盛り上がる
#新しい音楽をつくる

絆を深める、祭りの力！

「みんな」で何かをつくる現場には、
誰もが予期し得ないことが起こります。
仕掛けたアーティストや運営メンバーの想像を
はるかに超えた、うれしい風景が立ち現れることも。

準備のために何度も集まり、議論を重ねて、手を動かす。
「あの人は、普段何をしているんだろう？」と思いながら、
少しずつお互いの“できること”がわかってくる。

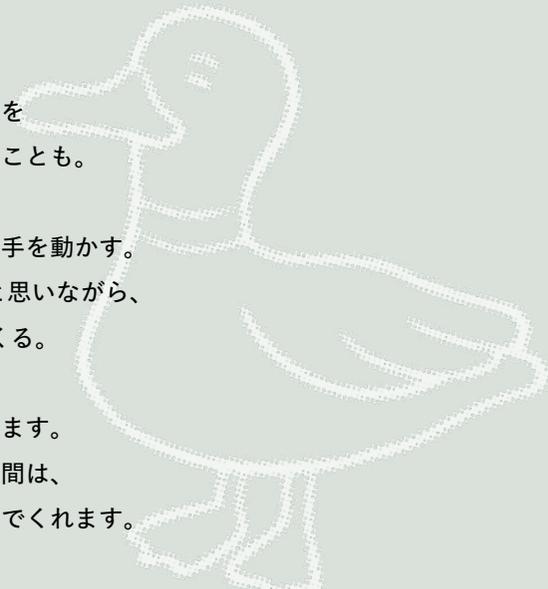
地域のお祭りは、防災訓練になるとも言われます。
一緒に協力しながらお祭りをつくり上げる時間は、
いざというときに声をかけ合える関係を育んでくれます。

実践のための

コツ

安全対策は万全にしましょう

多くの人がかかわる現場だからこそ、安全への配慮は最優先！ 準備段階から不測の事態を想定し、あらかじめ対応策を考えておくことも大切です。会場配置やスケジュールなどを関係者間で共有できるツールを作成し、事前に共有しておきましょう。安全管理は、先回りしすぎて損することはありません。



いつものアプローチとは違うけど、
求められている成果は出せそう。

団地の共用空間を活用した実験、
上司に提案してみようかな。



まずは、今度イベント
行ってみるかー！



協働を通して、自治を「耕す」こと

東京アートポイント計画は、東京都の「文化政策のパイロット・プロジェクト」として、2009年にはじまりました。当時、「新しさ」として受け止められたのは、教育、まちづくり、産業、福祉といった分野と連動する「総合政策」であったこと、そして「新しい公共」の担い手としてNPOをパートナーとしたことでした。

行政とNPOのあいだを行き来するなかで出会うのは、初めての仕事相手ばかり。当然、仕事の進め方は異なります。パートナーになるためには、どちらかのやり方に合わせるのではなく、新しい方法をともに編み出す「協働」が必要でした。協働がうまくいくとき、それはお互いが変化するときです。

2024年、わたしたちは東京アートポイント計画で培ったノウハウを活用し、東京都・区市町村連携事業をはじめました。都内の自治体における課題に応答し、新たなプロジェクトを立ち上げる。そのため、これまで以上に自治体の方々の声に耳を傾けることになりました。そこで気がついたのは、わたしたちの仕事がいまだに「新しい」ものとして捉えられているということ。伝わらない悔しさとともに、わたしたちの実践はよき前例として使えるのではないかと考えるようになりました。

しかし、各自治体は地域の文化団体との活動や

施設の管理運営など、既存の業務をこなすだけで手一杯。新たな一歩を踏み出すためには、その必要性に納得するとともに、着手するための余白が必要です。しかし、その余白は年々狭まってきているように思えます。だからこそ、自分たちですべてを抱えこむのではなく、課題と一緒に向き合うパートナーが必要なのではないのでしょうか。

協働に取り組むのは市民協働の部署だけではなく、まちのことを考えるのは企画や都市、シティプロモーションの部署ではありません。きっと文化の部署でも、市民との協働を手法として仕事に取り組むことができるはず。なぜなら文化事業に取り組むことは、地域の自治を耕す術になり得るからです。

異なる立場の人たちが議論を重ねるなかで、段々と互いのことを理解しはじめ、いつしか地域を「自分ごと」として考えはじめるようになる。とりあえず「やってみますか」とはじめてみて、小さな失敗を重ねながら、実感をもって地域の実情を学んでいく。プロジェクトが終わる頃には、次に何をやるかを考えはじめてしまう。わたしたちが現場で見てきたのは、そんな光景でした。

(文・佐藤李青)

2

関係の“地図”を描き直そう

郊外にある市役所で、
まちの文化振興に取り組む田中さん



「文化資源がない」と思われているまちで、
行政として何ができるのか悩んでいるようです。

観光名所も、目立った活動もない。
そんなまちを舞台にして展開できる
文化振興ってどんなことだろう？

田中さん

- ・郊外の市役所に勤務する20代後半
- ・市役所で働きはじめて5年目
- ・1年前に文化振興課に異動



田中さんが働くまちは、人口15万人ほど。
住宅地が多い、いわゆる郊外のまちだ。

文化振興課に異動してからは、
文化施設利用についての
相談窓口対応や

毎年秋に開催する
市民文化祭の調整が、
主な担当業務だ。

田中さんは、この隣町で生まれ
育ったので土地勘はあるほう。

自転車であちこち
遊びまわっていたので、
“庭”みたいな場所ですね！



数年前に策定された
文化振興条例と計画を受けて、
新たに発足した文化芸術推進委員会の
会議運営も行っている。

あつ〜
今日
会議ですけど…

まちの文化を議論すると……、

チャーシューや味玉(=観光地)なし、
醤油一択で勝負している素ラーメンって感じ？

シンプルだけど、
洗練されているという
わけでもない

そういうのも
好きなんですけどね〜

「何もないまち」と
言う人も少なくない。

でも日々の業務が忙しくて、
すでに決まった業務で手一杯！

まちの南側には、小さな川が流れていて、
大きな公園がある。



住宅地が広がる起伏のない風景だけど、
ゆったりとした気持ちになれて、いいまちだなと思う。

たそかれ…

普段は、役所にいるけれど、
もっとまちとかかわる方法が
あるのではないだろうか……。

でも、何から
手をつけたらいいのやら……。

うちのまち、ほんとに何もないのかな〜？

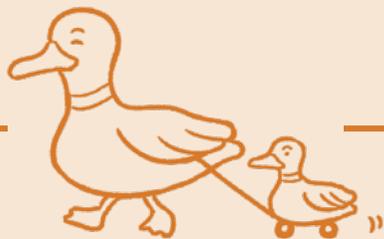


推進委員会でも「まちづくり」や
「他分野との連携」というキーワードが
出てくるけど、いまいちピンと来ない……。



なるほど。参考になるかもしれない
アートプロジェクトがありますよ！

“ともに歩くこと”から、
はじめよう！



カモさん

田中さん、散歩は好きですか？



田中さん

はい、休みの日は一人で散歩しながら、
まちの風景を楽しむのが日課です。



カモさん

実は、「まちを歩くこと」そのものを
プロジェクトにすることもできるんですよ！



田中さん

え？ そうなんですか？
でも、たしかに、同じ道だったとしても
誰と一緒に歩くかで視点も話題も変わるかも。



カモさん

さまざまなものごとの捉え方をもったアーティストが
ナビゲーターとして加わると新鮮な発見がありますよ！
日常と地続きの場所で新しい体験を生む事例を紹介しますね。

プロジェクト・ユングラによる

国分寺の〇〇さがし



撮影：松本和幸

「国分寺の〇〇さがし」は、市内で活動する「プロジェクト・ユングラ」にかかわるアーティストとともに、身体や音の視点からまちを見直すワークショップだ。振付家・ダンサーの神村恵さんと木村玲奈さんをナビゲーターとした回では、市役所から近隣の公園や住宅街をめぐり、木に身体を委ねる、ゆっくり坂道をのぼるなど、五感を使ってまちを体感した。参加者同士で新たな動きを考え、ダンス映像を撮影する場面も。音をテーマにした回では、舞台音響家の土屋光さん、作曲家の松本真結子さんをナビゲーターに、まちの音を録音し、聞こえた音をマップに書き込みながら採集。最後は、みんなで「おとマップ」を作成した。参加者の身体や感覚を手がかりに、見慣れた風景を捉え直す機会となった。

いつ

2025年

どこで

東京

#身体 #ダンス #音
#サウンドスケープ #採集
#まち歩き #少人数
#マップ #屋外
#晴れていると気持ちがいい



身体を通して
見慣れた風景を捉え直す



アサダワタルと市民メディエーターによる

想起の遠足



文化活動家のアサダワタルさんをゲストディレクターに迎えた「想起の遠足」。小金井市を舞台に、まちに暮らす「私」の記憶を「表現」に捉え直したプロジェクトだ。公募した市民メディエーター（記憶の変換者）とともに「まちの記憶」をテーマにツアーを構想。最終的にはアサダさんが案内人を務める「想起の大遠足」と、市民メディエーターが企画した15の小さな遠足を同時多発的に展開する「遠足コレクション」を開催した。中高時代に通った学校の思い出をたどる遠足、こどもが歩いている道をトレースする遠足など、まちに潜む個人の記憶を手がかりにしたユニークな遠足が多数生まれた。日常の風景に埋もれていた個人の経験が、まちの物語として浮かび上がっていった。

いつ
2017年

どこで
東京

#個人の記憶 #まちの思い出
#想起 #市民 #年齢問わず
#親子参加可 #少人数
#物語 #家に帰るまでが遠足

山城大督による

吉島・ピアノ・レッスン・コンサート



美術家・映像作家の山城大督さんが発表した「吉島・ピアノ・レッスン・コンサート」*。広島市の住宅地・吉島地区を舞台に、50人の少年少女が同時間帯に自宅のピアノを演奏する、1時間限定の同時多発自宅演奏コンサートだ。鑑賞者は地図を手がかりに住宅街を巡りながら、家々から聞こえるレッスン中のピアノの音に耳を傾ける。アーティストの視点から編み上げられた見方で、そのまちの日常に触れていった。演奏者の姿は見えなくても、曲が終わるたびに家の外から拍手が送られ、誰に届かわからないまま続く練習の時間そのものが、まちをつないでいく感覚を生み出す。どこを選んで歩くかで体験は変わり、演奏者と鑑賞者のあいだに、ゆるやかな連帯感が立ち上がっていた。

いつ
2009年

どこで
広島

#聴く #マップでめぐる
#住宅街 #演奏者と鑑賞者
#時間限定 #体験をつくる
#まちの風景が変わる

*作品《Time flows to everyone at the same time.》の展開の一つとして実施。



アーティストの視点で
まちの見方を編み直す

「何もないまち」なんて、どこにもない!

目立った観光地や歴史がなくても、
まちには、地形や自然環境、人々の営みが眠っている。
そう考えると「何もないまち」なんて、どこにもないんです。

まちの外から訪れる人は、
その土地の風景をととても新鮮な目で見つめます。
そこに暮らす人にとっては見慣れてしまっている
建物や道、看板や植木の一つひとつに立ち止まって、
「これはいいですね～」とおもしろがって眺めていく。

その視点に触れることで、普段の暮らしや風景といった、
いまここにあるものに目を向けるいい機会になりますよ。



実践のための

コツ

公共空間のルールを確認しましょう

公共空間には、さまざまなルールがあります。公園や道路、公共施設など一般参加者を募って活動する場合、許可が必要となることも。特に写真や動画を撮影する際は、場所の利用に加えて、被写体となる人やものの権利にも配慮しましょう。さらに、住宅エリアを歩くときには、そこで暮らす人々への気配りも忘れないように。

領域を横断し、つないでいくには……?



歴史や観光をテーマにしたまち歩きはよくあるけど、別の視点でめぐる方法を考えるのはおもしろいかもしれませんね! まち歩きならアートに馴染みのない人にも抵抗がなさそう。



「歩く」という日常的な行為からはじめられるのが魅力ですね。



まち歩きのマップづくりにもつなげられそうだし、行政として地域の新たな文化資源を発掘するきっかけとしても、いい機会になりそうだな。市民のみなさんから「地域の文化情報をまとめてほしい」という声が届いていたし!



いいですね! ……そういえば、田中さん! 文化芸術推進委員会の会議でお困りごとがあるとか?

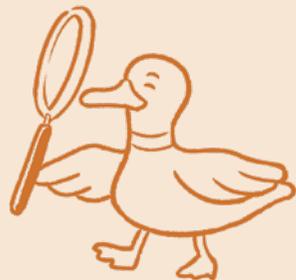


先日の委員会で、国の文化芸術基本法が話題になって。文化がいろんな分野を横断してつながっていくことの意義や、「有機的な連携」の必要性とか……。難しいと思っていたけど、まちを舞台に展開する活動にはヒントがありそうです。でも、行政はどうしても縦割りになりがちなんですよね……。



制度そのものをすぐに変えるのは難しくても、現場での小さな実践から横断がはじまることはありますよ!

行政の部署の“あいだ”を のぞいてみよう！



田中さん

部署を横断するのって、簡単じゃないんですよね……。



カモさん

わかります。ただ、まちでアートを展開していくと、不思議と分野を横断せざるを得ないことが起こるんです。一つの活動が、福祉や教育、産業振興、都市整備など、複数の部署にかかわる内容になっていくことがあります。



田中さん

たしかに、コミュニティづくりといっても、高齢者福祉にも、こどもにもかかわるし……。



カモさん

アートの特徴の一つは、肩書きや属性ではなく、一人の個人として出会うところからはじめる点にあります。もともとアートは社会のなかでの位置づけが少し曖昧で、いろいろな境界にまたがってきました。その曖昧さが、“あいだ”に入り込む余白をつくっているのかも。

アサダワタルによる

ラジオ下神白



福島県いわき市の復興公営住宅を舞台に展開された「ラジオ下神白」。東日本大震災後に建設された団地で行われたプロジェクトだ。文化活動家のアサダワタルさんをディレクターに、住民一人ひとりに思い出の音楽について話を聞き、その語りをラジオ番組として編集し、配信・共有する。入居者の多くは人生経験豊富な高齢者で、音楽をきっかけに語られる記録には、それぞれ異なる時間や背景が折り重なっていく。ラジオ番組に収録された「声」は、集会所での顔合わせとはまた異なる、住民同士の出会いをつくっていった。すでに被災者支援や包括ケアなどの取り組みがある現場で、文化的なアプローチとして住民のあいだに「別の」出会いの回路をひらいた例でもある。

いつ

2016年～

どこで

福島

#ラジオ #音楽 #被災者支援
#ケア #お宅訪問 #高齢
#人生の語り #声で出会う



思い出の音楽を通して
「私」と「私」の出会いをひらく



ACKT (アクト/アートセンタークニタチ) の
GREEN GREETINGS



行政と市民が連携し
自分たちの場所に変える

まちなかでの活動を展開する上で、公園は代表的な公共空間の一つ。「GREEN GREETINGS」は、駅前の緑地を自分たちの手で整備しようという取り組みだ。活動の母体であるACKT (アクト/アートセンタークニタチ) は、これまで市の文化担当部署と連携しながら事業を行ってきた。緑地は空き家を改修した拠点「さえき洋品●(てん)」の斜め向かいにあるため、活動を連動させ、緑地の管理をする環境政策課とも連携している。月に1回、植栽の手入れや勉強会など具体的な作業を重ねることで、これからの緑地の使い方を参加者と考える。行政が「管理する場所」であった公共空間を、行政の異なる部署や、NPO、市民と一緒に動くことを通して、「自分たち」の場所に変えることを目論んでいる。

いつ

2024年～

どこで

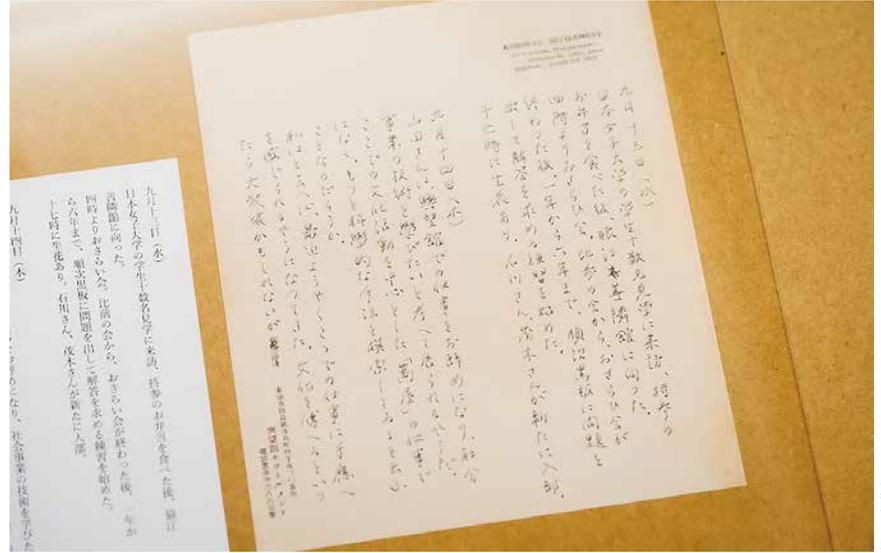
東京

#緑地・公園 #園芸 #屋外
#コミュニティガーデニング
#毎月 #数時間 #環境
#部署間連携
#市民参加で公共空間をつくる

2 関係の「地図」を描き直そう



ファンタジア!ファンタジア!×碓井ゆいによる
社会福祉法人興望館リサーチ&展覧会



分野を横断し
過去といまの営みとつなぐ

地域の文化資源を手がかりに、まちを学びの場に見立てる「ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—」では、アーティストの碓井ゆいさんを招き、墨田区で保育事業を100年以上続ける社会福祉法人興望館と連携したリサーチを行った。セツルメント運動の拠点として出発した興望館は、現在も保育園と児童養護施設の運営を通じて、地域に根ざした実践を続けている。碓井さんは、館内に残された保育日誌や写真資料の調査に加え、学童クラブに通う子どもたちとワークショップを実施。リサーチや活動の内容紹介と、碓井さんの作品をあわせて展覧会として発表した。同じ地域で活動する、異なる分野のスキルや視点をもった人たちがかわることで、地域に蓄積されてきた実践が共有された。

いつ

2021年～2022年

どこで

東京

#福祉 #保育 #刺繍
#100年の歴史 #リサーチ
#数か月 #施設の記録
#展覧会 #分野違いのお隣さん

撮影：加藤 補

境界を越える関係をつくりましょう

一人ひとりの話を丁寧に聞く。

まちのなかにある空間を自分たちでなんとかしたいと思う。

近所にいる人たちがどんな活動をしているのか関心をもつ。

—— そんな暮らしの延長線上にあるごく当たり前の行為が、プロジェクトとして立ち上がる時、「協働」が生まれます。

分野や制度の境界をなくすことは難しい。

でも、「どこに境界があるのか」を互いに知り、必要に応じて行き来できる関係性をつくることはできるかもしれません。

そのためにも、同じ場に立ち、同じ課題に向き合い、

同じ時間を共有する。その経験が分野の違いを超えて

協力するための土台を育てていくのではないのでしょうか。



実践のための

コツ

分野横断のパートナーを見つけましょう

分野横断を進めるためには、その分野に精通した地域団体や、すでに実践を重ねている人たちとの連携が欠かせません。とはいえ、アートはあらゆる分野に機能する万能薬ではありません。しかし、「これまでの方法では立ち行かない」と感じている現場と結びつくことで、思いもよらなかった新たな突破口をひらく力があります。

文化を横串に、共生をひらくためには？



アートって文化課の仕事だと思っていたけれど、ほかの部署ともかかわってくるものなんですね。



そうなんです。むしろ、文化は“横串”。部署を越えて動くことで、力を発揮しますよ。



文化振興計画の推進体制にも、庁内部署の横断的な調整が役割として記載がありました。でも、どうしたら現場で実践できますかねえ……。



企画政策やシティプロモーションを担当するような、まちの取り組み全体を見ている部署との相性もいいですよ。



なるほど、そういうふうを考えていくといいですね！「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」もあるし、障害のある人とかかわりのなかでもできることはあるかも。市長も「地域共生社会を実現しよう」と話していたし。



部署を横断した取り組みのアイデアが湧いてきますね。違いを認め合い、ともに場をつくる営みこそ、アート！文化担当として、共生をひらく役割も果たせるかも。

“みんな”って誰のこと？



田中さん

私たちが前提にしている“みんな”って、誰を指しているのか気になってきました。



カモさん

いままさに“みんな”の範囲そのものを問い直す活動が増えています。とても当たり前のことではありますが、人それぞれに物事を捉える感覚は違いますよね？言語など、コミュニケーションの手法が異なれば、背景として持っている文化も異なります。



田中さん

たしかに。でも、交流を促すプログラムを考えると、無意識のうちに「参加しやすい人」を基準にしていたかも。



カモさん

「みんなのために」と思っていた取り組みが、実はある層に偏っている可能性もあるわけですね。まずは、その前提に気づくことから始めましょうか！

一般社団法人○○○による
めとてラボ



「めとてラボ」は、手話を主な言語として使うメンバーを中心に、誰もが「わたし」を起点に思考や実験をはじめるとして立ち上げられたアートプロジェクトだ。さまざまな身体感覚や思考をもつ人々が出会い、「め」と「て」で伝え合うなかで生まれる言語や身体の使い方を手がかりに、新たなコミュニケーションの仕組みや手法づくりを試みている。近年は、ろう者の生活空間である「家」に着目し、空間を見渡せる吹き抜けや照明の工夫など「見る」ことを中心に環境をデザインする「デフスペース (DeafSpace)」の考え方をリサーチし、展覧会やトークなどで情報発信を行っている。その知見は西日暮里駅近くにある活動拠点「5005(ごーまるまるごー)」の空間設計にも反映されている。

いつ

2022年～

どこで

東京

#目と手 #見る #手話
#デフスペース #空間設計
#コミュニケーション
#手法づくり
#文化の異なりを認め合うには



さまざまな身体感覚から
「伝える」を実践する



“いい作品”をつくることが
“いい関係”を育んでいく

一般社団法人パンタナルによる

KINO ミーティング



「KINO ミーティング」は、“海外に（も）ルーツのある人たち”とともに、都内各所で映画づくりを通じたワークショップを行うアートプロジェクトだ。参加者はまちを歩きながら、写真や映像、音声を用いて自身のルーツと向き合い、その過程で得た視点をもち寄る。監督や脚本、撮影、出演など多様な役割があり、その過程では密なコミュニケーションが求められる映画制作。ここでは、異なる背景をもつ参加者同士がグループを組み、脚本、演出、技術、出演といった役割を交換しながら映像作品を完成させていく。「いい作品」をつくるための熱のこもった議論では、意見がぶつかることもある。それ自身が「当事者」を外側から語るのではなく、協働作業を通じた「いい関係」づくりのプロセスになっている。

いつ
2022年～

どこで
東京

#映画制作 #写真 #映像
#海外ルーツ #コミュニティ
#役割の交換
#協働作業が新しいかわりをつくる

小金井アートフル・アクション!の

映像メモリーちゃんぽんクラブ



年齢なんて関係ない!?
世代を越えて学び合う



70歳以上のシニア世代が中心となり、映像制作に取り組むプロジェクト「映像メモリーちゃんぽんクラブ（通称：えいちゃんくらぶ）」。スマートフォンやデジタルカメラに触れた経験がなくても参加でき、映像づくりのはじめの一步から学びながら、撮る・つくる・遊ぶことを通して表現に親しんでいる。サポートメンバーには若い世代も加わり、「映像」「メモリー」「ちゃんぽん」をキーワードに、世代を超えた交流が生まれてきた。参加者それぞれが積み重ねてきた経験や記憶を手がかりに、撮影や編集を行い、自分なりの表現を探っていく点も特徴だ。活動の集大成として、年の終わりには作品を上映する場「えいちゃんふえす」を開催し、つくる過程と成果を地域にひらいている。

いつ
2017年～

どこで
東京

#映像制作 #記憶 #シニア
#70歳以上 #作品発表 #通年
#技術を学び合う
#コロナ禍にZoomを使いこなす

まずは“みんな”を問い続けることから！

プロジェクトの企画を考えると、わたしたちは、
つい「みんなで」「誰もが」という言葉を掲げてしまいます。
でも、わたしたちが“みんな”と考えていた範囲は、
実はとても狭いものだったのかもしれない。

言語の違いによって参加方法自体がわからなかった人、
時間帯の設定や身体的な条件、心理的な距離から
参加が叶わなかった人もいたかもしれない。

その不在に思いをめぐらせること、
そして、何が壁になっていたのかを問うこと。
そんな想像力を持ち続けることが、あらためて
企画のあり方を考える出発点になるのだと思います。



実践のための

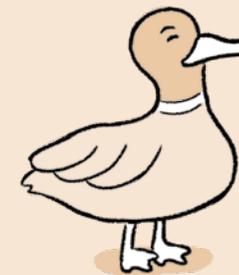
コツ

呼びかけ方を工夫しましょう

企画の趣旨説明や参加者募集の告知文で、「対象」をどう記すか。どの言語を用い、どのようなメディアで発信し、どの経路で届けるか。慣例的に続けてきた広報も、一度立ち止まって見直してみることが大切です。これまでの参加対象を問い直すことにつながり、ひいてはプロジェクトの進め方そのものを変えていききっかけにもなります。

つい「誰もが」って言うけど、
結局あまり対象が見えていなかったかも。

いろんな人と会うことから、
まちの魅力を発見していきたいな。



まだまだ知らない魅力が
眠っているはずですよ！



消費されない「関係」を育むために

まちづくりやイベントの現場でよく耳にする「人が集まる場をつくりたい」という悩み。しかし、よかれと思って場を整えれば整えるほど、参加者が「お客様」になってしまい、肝心の関係性やコミュニティが育ちません。

わたしたちが無意識に陥りがちなのは、機能性や効率を重視した「企画」の思考様式です。例えば「交流のためにカフェをつくる」と決めた途端に、訪れる人は自然と「お茶を飲む場所」の「客」としてふるまいはじめます。場所が人々の動きを先取りしてしまい、知らず知らずのうちに、その設計に従ってしまうのです。

わたしたちが共催してきたアートプロジェクトには、日常の行為を「ほんの少しずつ」仕掛けがあります。例えば、映像と一緒にじっくりと見てみる。特別な技術を必要としない、見る・語る・手を動かすといった行為が「関係を養う役割」として働きます。アートプロジェクトを「媒体」として介在させることで、何気ない会話からつながりが生まれていくのです。

重要なのは「何もやることがない」と、「やることを決めすぎない」ことのあいだで場を設計することです。現代の公共空間には、あらかじめ決められたふるまいがこびりついています。学校の

椅子に座れば授業を受ける人になり、会議室に入れば発言する人になってしまう。その「こびりつき」を少し変化させるだけで、“場”は別の“何か”に変化していきます。

非日常の体験をつくるのではなく、日常のなかに知らないものが入ってくる状況を意図的に生み出してみる。すると、そこには「なんだかよくわからないけど、その場に来たくなる」雰囲気が漂ってきます。お金を払ってサービスと等価交換する関係から、いつかどこかで誰かに返すような「贈与」へと関係の重心がじわりと移っていく。そうすることで、参加者は「お客様」から「その場を味わう当事者」へと変化していきます。アートプロジェクトは「消費されない関係」の土壌づくりなのです。

交流や場づくりに正解のノウハウはありません。だからこそ、自分たちで抱え込みすぎず、アーティストや専門家と協働していく「引く」姿勢が必要です。外部の人に頼むことで広がる可能性を呼び込み、ひと手間をかけた小さい仕掛けが、消費されずに持続し続ける豊かな交流の場を育てていくのだと思います。

(談・森司)

3

もっと仲間を増やそう

洋食店を営みながら、
アートを広める団体を運営する新藤さん夫婦



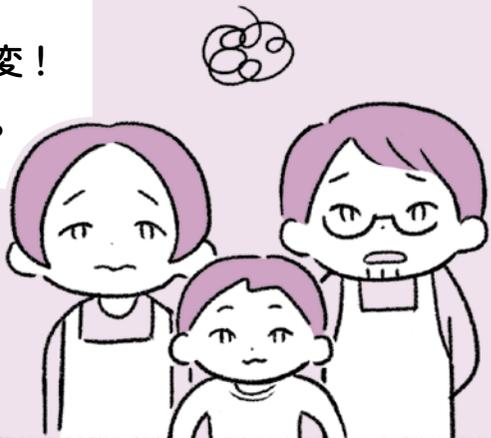
仲間との活動は充実しているものの、
仕事との両立に少し疲れを感じはじめています。

相 談

やりがいはあるけど、
プロジェクトと仕事の両立が大変！
無理なく続けたいんだけど……。

新藤さん夫婦

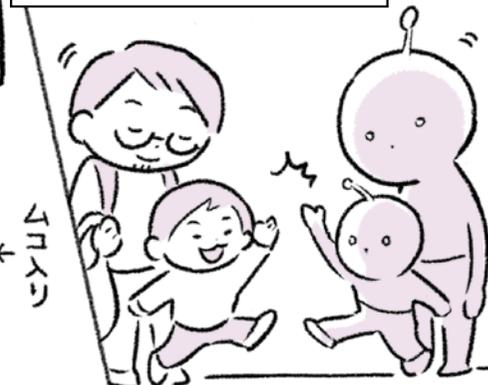
- ・妻の両親が創業した洋食店を受け継ぎ、経営している40代半ばの夫婦
- ・アート活動を広める団体に所属し、運営マネジメントを担っている
- ・保育園に通う5歳の子どもがいる



新藤さん夫婦が営む洋食店は、
妻の両親から受け継いだ大切な店だ。

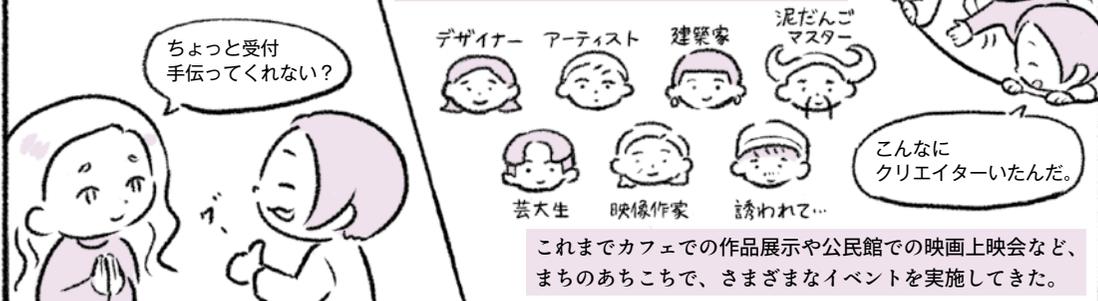
レストラン
ニューフジ

子どもが生まれてからは、
保護者同士のつながりもでき、
地域での関係もさらに広がってきた。



友人に誘われ、3年前から、
地域でアート活動の普及に
取り組む団体にもかかわることに。

団体の主な構成メンバーは、
このまちに暮らすデザイナーやアーティスト、
建築家などのクリエイターなどなど。



ちょっと受付
手伝ってくれない？

こんなに
クリエイターいたんだ。

これまでカフェでの作品展示や公民館での映画上映会など、
まちのあちこちで、さまざまなイベントを実施してきた。



運営に参加するのは楽しいものの、
いつも慌ただしく、少し疲弊気味だ。

飲食店経営の経験をもつ二人は、
いつのまにか運営の主要メンバーに。



いいかたちで続ける方法ってないのかな～？

とてもやりがいを感じてはいるのだけど、
この体制・方法で進めていくのは限界かも……
仲間と楽しく分担できたらいいのになあ。

長く継続するためには工夫が必要かも！
いろいろな現場から生まれた知恵を紹介します。

3 もっと仲間を増やそう

記録や発信も、 ともに楽しく！



新藤さん(夫)

イベントごとにチラシやポスター、SNSなど告知するのがけっこう大変……。



カモさん

日々の活動を伝えるニュースレターのようなものが告知や広報につながることもありますよ。



新藤さん(妻)

たしかに、準備や何気ないやりとりのなかに、プロジェクトらしさを感じる瞬間もあるなあ。



カモさん

記録作成やメディアづくりを軸にして、プロジェクトを立ち上げる事例もありますよ！
文章を書く人、写真を撮る人、レイアウトを考える人……
役割を分けると自然とチームができていって、
かかわりしろも増えるんです！

ファンタジア!ファンタジア! ファンファンレター



撮影：高田洋三

墨田区を舞台に、さまざまな出会いを通して豊かに生きるための創造力を育む「学びの場」を生み出していくアートプロジェクト「ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—」(通称：ファンファン)では、活動を発信する定期刊行物として「ファンファンレター」を発行。つくり方は至ってシンプル。地域のボランティアセンターや「藝とスタジオ」のリソグラフ印刷機を活用し、学級新聞のようにハサミとノリで記事を切り貼りし、オリジナルのスタンプを押しながら誌面を構成していく。作業の最中には何気ない対話が生まれ、普段の会議では表に出にくい話題が共有されることもある。メディア制作そのものが、プロジェクト内外の関係を支える営みとして根づいている例だ。

いつ

2019年～

どこで

東京

#リソグラフ #紙
#ハサミとノリ #日々の出来事
#プロジェクトの記録
#テーブルを囲む
#作業とコミュニケーション
#会議では話せないこと



メディアづくりが
プロジェクトを支えていく



新たな関係づくりの入り口としてのラジオ

Artist Collective Fuchuの おとのふね



NPO法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ(ACF)が企画・制作するラジオ番組Artist Collective Fuchu presents「おとのふね」。府中市の地図を船に見立てた番組名のもと、プロジェクトメンバーがパーソナリティを務めている。もともとはコミュニティFMで月に1回の番組としてスタートし、YouTube配信や自治体との連携事業など活動の場を広げている。毎回、府中や近隣地域で活動するアーティストや、今後かわりをつくりたい人々をゲストに迎え、それぞれの活動について声を交わす。地域やメンバーの活動紹介コーナーは、地域の動きを共有するメディアとして機能している。ラジオの枠組みを使うことで、初めての相手と出会う、関係づくりのメディアともなっている。

いつ
2019年～

どこで
東京

#ラジオ #トーク番組
#コミュニティFM #YouTube
#地域情報
#ラジオ出演はきっかけになる

Art Bridge Instituteの ART BRIDGE



大きな誌面が
ネットワーキングの場所になる



撮影：江上真一郎

Art Bridge Instituteは、国内外のアートプロジェクトや芸術祭、「生きる技術としてのアート」をリサーチし、機関誌『ART BRIDGE』として1年に1回発行。メディア制作そのものをプロジェクトとして位置づけることで、取材や編集を通して、人や活動のあいだに新たな接点をつくることを試みてきた。誌面は、複数人で囲みながら読むことを想定した見開きB3サイズの大判を採用し、読み手同士の共有や対話を促す設計となっている。トークの記録を収録し、発刊したメディアを読むなど企画とメディアの往還関係をつくった。誌面をつくるための取材は、国内外の動向のリサーチとなり、つくり手と読み手の双方にとって、次のプロジェクト構想やネットワーキングの回路をひらくものにもなっている。

いつ
2015年～

どこで
国内外各地

#雑誌 #写真 #テキスト
#ネットワーキング #リサーチ
#大きな誌面 #複数人で囲む
#メディアづくりがプロジェクト

メディアづくりを プロジェクトとして位置づけよう！

日々を記録し、言葉にし、写真を選び、編集する。

活動を振り返りながら「何をおもしろいと感じているのか」

「どんな瞬間を大事にしたいのか」を話し合う。その時間は、

それぞれの思いを持ち寄り、共有する機会にもなります。

そんな対話から「次はこんなことができるかもしれない」

というアイデアや、新しいネットワークの芽が生まれます。

また、メディアづくりを活動の中心に据えると、

「それならかわってみたい！」という人が現れることも。

メディアは、「外に向けた窓」であると同時に、

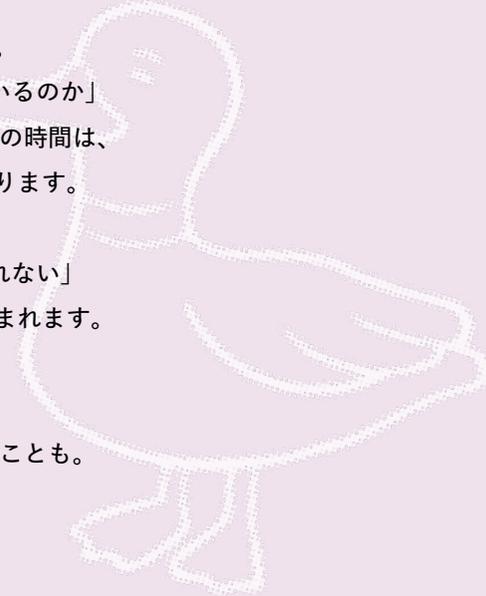
「内側の関係を育てる装置」でもあります。

実践のための

コツ

続けられるペースを見つけましょう

発行リズムを決めることが大切です。毎月か、隔月か、はたまた隔週か——定期行物やシリーズとして位置づけると、発行時期から逆算して制作スケジュールを組み立てることができますし、プロジェクト全体の進行を考える上でのマイルストーンにもなるでしょう。継続していくことで、活動の積み重ねがそのまま記録として残っていきます。



魅力的な活動や拠点が増えてきたら……？



「あ、発信しよう」という話題になるたび、いつも慌ててSNSなどの対応をしている気がします。



リズムが決まっていると、「次はこれを出す時期だね」とプロジェクトメンバーも自然に動けるようになりますよ。



そういえば、最近活動に参加している加藤さん、昔、地域のラジオ局で働いていたって言ってたなあ。水野さんも以前は地域雑誌のライターをしていたとか！



おお、心強い。素敵な編集部がくれそうですね！



お、編集チームの誕生!? 楽しみです！最近、雰囲気の良いカフェや本屋も増えてきていたり、知り合いのアーティストやクリエイターのアトリエなど、素敵だなと思える場所が増えてきているんですよ。



わたしもふらりと立ち寄れる場所が増えてきて、なんだか楽しくなってきたな～と思ってた！



いいですね！ まちの魅力的な場をつなぐ、いいプロジェクトがありますよ！

点在する活動をつないでみよう！



カモさん

まちを見渡してみると、カフェ併設のギャラリーや少し変わった外観のアトリエなど、すでにおもしろそうな場所や活動が点在していますよね！



新藤さん(夫)

最近増えてきました。気になってはいるけれど、なんとなく入るきっかけがない場所も多いです。



カモさん

それぞれは単独で存在しているけれど、それらを一つの枠組みでつないで見せると、まちをめぐる理由が生まれます。



新藤さん(妻)

バラバラだった場所が、一つの企画で結ばれるわけですね。



カモさん

まちなかにある“点”を、ゆるやかにつないでいく。そういうプロジェクトもありますよ！

墨東まち見世&まちみてマップ



墨東エリアでまちづくりにかかわるメンバーが集うNPO法人向島学会を中心に開催された「墨東まち見世」。下町の生活文化が色濃く残る墨東エリアに点在する小さな拠点や活動をつなぎ、可視化するアートプロジェクトだ。開催期間を設定し、普段はばらばらに活動をしている人たちが、同じタイミングでそれぞれプログラムを企画。来訪者は、象徴的なインフォメーション屋台を手がかりに、地域をめぐるっていった。開催プログラムは展示やイベントに限らず、日常的な活動を「見せる」ことを意識。ここで見えるようになった拠点や活動は、その後『BOKU-to-TekuTeku まちみてマップ』としてまとめられ、地域資源をいかしたアートやまちづくりにかかわる人々のゆるやかなネットワークへと引き継がれていった。

いつ

2009年～2013年

どこで

東京

#地域資源 #小さな拠点と活動
#マップ #まちを歩く
#プラットフォーム #屋台が目印



まちの小さな活動を
イベントとマップでつなぐ



museum shop T × Gallery Yukihiro × 田尾企画編集室ら有志による

Kunitachi Art Center



撮影：小野悠介

「Kunitachi Art Center」は国立市を舞台に、まちに点在するギャラリーや店舗、アトリエなどを会場としたアートイベントだ。緑豊かな文教都市・国立市周辺では生活圏のなかに小さな拠点が点在している。そのなかの複数の拠点が連携し、まちをアートの視点で捉え直すために立ち上げられた。会場は国立市から国分寺市や立川市へと広がっているが、坂が少なく自転車で回遊しやすい地形をいかし、レンタサイクルの情報を盛り込んだマップやスタンプラリーを通して、来訪者がまちをめぐる仕組みが整えられている。会期中には、ボランティアチームCASTによるアテンドツアーやトーク、作品ガイドなどのプログラムも実施され、制作の背景や実践のプロセスに触れる機会も用意されている。

いつ

2020年～

どこで

東京

#まちに点在 #ギャラリー
#アトリエ #店舗 #マップ
#住宅街 #まちをめぐる #ツアー
#まちの真ん中にアートを入れる

Super Open Studio NETWORKによる

SUPER OPEN STUDIO (S.O.S.)



東京造形大学、多摩美術大学、女子美術大学、桜美林大学など、美術系大学が近隣に点在する神奈川県相模原エリアで展開する「SUPER OPEN STUDIO (S.O.S.)」。相模原市周辺に拠点を構える20軒を超えるスタジオと約100名のアーティストが参加し、普段はなかなか訪れることができない制作現場(改修した倉庫や廃工場を含む)を、年に一度、同時多発的に公開するオープンスタジオ企画だ。会期中には、点在するスタジオをめぐるバスツアーなど、アーティストや制作現場と距離を近づけるような関連イベントも行われる。つくり手のスタジオが多い土地柄をいかした企画は、アーティスト同士のネットワークづくりも担っている。この取り組みは、10年以上継続しており、その活動をまとめた記録集も刊行されている。

いつ

2013年～

どこで

神奈川、東京

#美大が多い #制作
#スタジオ #アトリエ
#倉庫や工場を活用
#つくり手が集まる
#ネットワーク #バスツアー
#創作の場をめぐる仕組み



複数のスタジオをつないで
地域の特徴を可視化させる

地域特性をいかした

まちの回遊プログラムをつくる

3 もっと仲間を増やそう

まちの動きを可視化する

日常に溶け込んでいて気づきにくいですが、まちでは、すでにさまざまな活動が営まれています。期間を定めて、まとめて見せるような企画があると、それらの存在は多くの人に共有されるようになります。

小さな取り組みが点在しているまちもあれば、大きな拠点が中心になっている場合もある。あるいは、これから新しい動きを育てる場所もあるかもしれません。

同じ地域で活動する人たちが、一つの枠組みのもとに集まって何かをやってみることは、新しい関係をつくるきっかけになるのだと思います。



実践のための

コツ

ゆるやかにつなぐ目印をつくりましょう

「いつ、どこで、何が見られるのか」という情報のわかりやすさが重要です。それぞれの活動や場所に個性があるからこそ、同じ枠組みで整理する作業が必要になります。めぐる人の立場に立った情報提供を心がけましょう。「同じ企画だ」とひと目でわかる共通のサインやビジュアルがあると、まちのなかで自然とつながりが感じられます。

共感や好奇心でつながるチームって……？



新藤さん(夫)

このまちにはつくり手の人が多いから、すべてを自分たちだけで企画するよりも、つなぎ手を担ったほうがいい影響が生まれるかも。



新藤さん(妻)

でも、実際にやるとなると調整が大変そうで……。専門スタッフを雇うほどの予算もないなあ。



カモさん

そもそも、みなさん本業やそれぞれの活動があって、その延長線上でかかわっているんですね？



新藤さん(夫)

そうなんです。仕事として依頼する、というよりは、楽しみながら参加していますね。



カモさん

それなら、“雇う・雇われる”の関係にこだわらなくてもいいかも。アートの現場では、報酬だけではない動機——共感や好奇心、場のおもしろさ——で人がかかわることがあります。



新藤さん(妻)

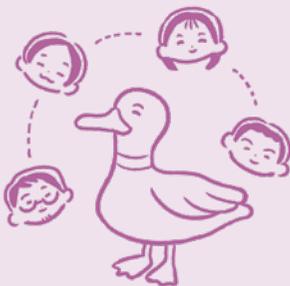
なるほど……。でも、どうしたら集まってくれるかな？



カモさん

稼ぐ仕事とは別の回路で動くかわり方を、どう設計するか。このまちらしいアートのかたちがつくれるチャンスかも！

チームができると、 活動が広がる！



新藤さん(夫)

やっぱり、人手不足は常に課題ですよ。
やりたいことはあっても、動かす人が足りないとか……。



カモさん

でも、ただ“手を増やす”ことだけが解決ではないかも。
ともにプロジェクトを動かし、楽しめるチームが広がると、
活動はもっと豊かに展開していきますよ。



新藤さん(妻)

手伝ってもらう、というより、
一緒につくる仲間になる、という感じでしょうか。



カモさん

そうです。そのような経験を軸にした、
チームのあり方が、アートの現場にはあります。
人をただ“集める”のではなく、経験を“共有する”。
その積み重ねが、自然とチームを育てていきますよ。

Memorial Rebirth 千住の 大巻電機 K.K.



1分間に最大1万個のシャボン玉を生み出す装置を数十台並べ、無数のシャボン玉によって見慣れたまちの風景を一瞬で光の風景へと変貌させる、現代美術家・大巻伸嗣さんによるアートパフォーマンス「Memorial Rebirth 千住(通称:メモリバ)」。「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」が千住を起点に、区内の小学校や公園など毎年場所を変えながら開催してきた。この取り組みを支えるのが、シャボン玉マシンの警備など運営サポートを担いながら、人と人、人とまちの新たな縁をつくる市民チーム「大巻電機K.K.」の存在だ。地域の小中学校のPTAや地域活動に関心のある親世代、大学生など幅広い層で構成されている。本番に向けてPRや地域イベントでのパフォーマンスなど通年で活動をつくり上げている。

いつ

2011年～

どこで

東京

#シャボン玉 #パフォーマンス
#屋外 #風景を変える
#みんなで盛り上がる
#マシンを動かす
#プロジェクトに必要な不可欠なチーム



通年のかかわりが
祭りの継続を支える



チームを育むことで
プロジェクトが続いていく

TERATOTERAの テラッコ



JR中央線沿線を舞台に展開されたアートプロジェクト「TERATOTERA」を支えていたのが、「テラッコ」と呼ばれるボランティアスタッフだ。仕事や学業をもちながらもアートにかかわりたいという動機で集まったメンバーで構成され、約10年にわたる活動の後半には、テラッコ主導でアーティストを選定し、制作や発表に伴走する役割も担うようになっていた。そこで築いた関係をきっかけに、別の現場でアーティストを手伝うメンバーも現れ、プロジェクトを越えたつながりへ発展することも。テラッコたちは「テラッコ屋」と名づけた定期的な集まりをひらき、企画会議や勉強会を実施。会の終わりには飲み会へと流れ、中央線沿線という土地柄も相まって、そうした時間がチームの推進力となっていた。

いつ
2009年～2021年

どこで
東京ほか全国各地

#ボランティアスタッフ #企画
#制作 #定例会
#アーティストとつくる
#みんなで盛り上がる #中央線
#飲み会が育むコミュニティ

Studio 04での のと部



「東京から能登を応援する」をキャッチコピーに、一般社団法人NOOKと編集者の川村庸子の発案により発足した「のと部」。2024年の能登半島地震と豪雨をきっかけに、何かできないかと考える人たちを中心に、月に1回、江東区にある活動拠点「Studio 04」に集い、活動報告や今後の取り組みを共有している。オンラインのグループウェアで日々連絡を取りながら、現地に足を運ぶ人、グッズをつくる人、Podcastで配信する人など、関心やスキルごとに「班」を組成。中心的なリーダーは存在せず、「Studio 04」という場があることで、さまざまな技術をもった人たちが集うことができ、互いの想いを確かめることで実践へ踏み出し、励まし合うコミュニティが育まれている。

いつ
2024年～

どこで
東京、能登

#復興支援 #能登 #何かしたい
#オンラインツールを活用
#情報交換と活動報告
#月1回の定例会
#場所が育む関係性
#励まし合うコミュニティ



「できること」を持ち寄り
離れた地域に思いを馳せる

“プロセスをひらくこと”も楽しもう！

プロジェクトを内輪の忙しさで閉じるのではなく、
 かかわりしるをひらいていくことで、活動がより豊かになっていく。
 さまざまな人がかかわる分、ものごとを決めるには時間がかかります。
 実践にたどりつくまでに、何度も話し合い、迂回することも。
 それでも、その道のりをともにゆっくり歩いていくことで、
 プロジェクトは少しずつ「自分ごと」になっていきます。

『アートプロジェクト運営ガイドライン』の著者・帆足亜紀さんは、
 アートプロジェクトはかかわった人たちに「共感」「共有」「協働」「やりがい」
 「多様性」「自由」「創造性」を生み出すものだと述べています。
 単に作業を分担する場ではなく、そうした経験が立ち上がる場であること。
 そこに、アートの現場ならではのチームのあり方があるのだと思います。

実践のための

コツ

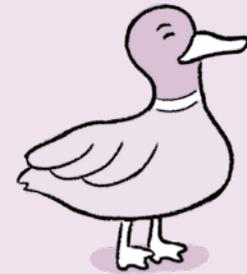
情報共有の仕組みをつくりましょう

流動的に動くメンバーでの情報共有には工夫が必要です。定例会の開催、メーリングリストやグループウェアの活用など方法はさまざまですが、正解のかたちはありません。ただ、オンラインでのやりとりは便利な反面、認識のずれが生じやすい面も。時々、顔を合せて話せる場を設けることが、チームの関係を保つコツです。

自分たちだけで閉じていたのが、
 課題だったのかもしれない。

タスクに追われるのではなく、
 一緒に企画を動かす仲間を
 募ってみようかな。

かかわる人たちが楽しめる
 やり方を考えていこう



「続ける」ための知恵は、現場にある

アートプロジェクトの現場を見ていると、長く続いている活動には、たいてい「定例会のあとの飲み会」や「会議の合間のたわいもないおしゃべり」といった習慣が根づいています。一見すると事業とは関係のないもので、はじめは余談のようなものだと思っていました。しかし、現場に伴走し続けているうちに、そこにこそ活動が続いていく理由があると気づいたのです。

タスクをこなすためだけに集まっているチームは、タスクがなくなると散り散りになってしまう。一方で、「あの時間が好きだから」という感覚を共有しているチームは、壁にぶつかっても、なんとか一緒に乗り越えられる。楽しさは、活動のおまけではなく、持続のための燃料なのだと思います。

活動を続けていくと、「自分たちだけで抱えるには、もう限界かもしれない」と感じる瞬間が訪れることがあります。そのとき、多くの人々がぶつかる壁が「誰かに頼む」こと。「急に声をかけたら迷惑じゃないか」「うまく伝えられるかな」「逆に気を遣わせてしまうかも……」「謝礼をどうしよう?」。そうした相手を思いやる気持ちが、かえって声をかけることをためらわせてしまう。

でも、思い切って「手伝ってほしいことがある」「これをやってみない?」と誰かに声をかけてみる

と、思いもよらない展開が待っていることがあります。地域にいるラジオ経験者、文章を書くのが得意な人、記録や写真が好きな人。まずは身近な人たちの「できること」を持ち寄ってみる。そうして、人、場所、ものがそれぞれ役割をもってつながっていくとき、活動は一人では到達できなかった豊かさをもちはじめます。

もちろん、誘ってみてもうまくいかないこともあるでしょう。役割分担がうまく噛み合わなかったり、お互いの行動がすれ違ってしまったり、でも、はじめから完璧なチームはありません。そうした小さな失敗や遠回りもまた、チームとしての実感を育てる時間です。

課題があるときも、順風満帆なときも、まずは「一緒につくる時間を楽しめているか」を問い直すこと。そして定期的に集まるリズムや、一緒に手を動かす作業をつくっていくことも大事です。そうした小さな積み重ねが、気づけば活動を支える土台になっていきます。「続ける」ためのポイントの一つは、かかわる人々が「また来たい」と思える場をつくり続けることなのかもしれません。

(文・小山冴子／川満ニキアン)

おわりに

悩みは続くよ、どこまでも

「どうやら、わたしたちの悩みには、アートプロジェクトが合いそうだ」。本書を読んで、そう感じていただけたなら、これほどうれしいことはありません。

けれども、そこから「まずはやってみましょう」と一歩踏み出すことが、一番難しいのかもしれない。

そんなときは、悩みを共有したい人たちと、テーブルを囲み、本書を真ん中に広げて話をしてみてください。

「こんな取り組みがあるけれど、どうだろう?」

「千葉さんの話、共感できますね」

「前例があるなら、やってみてもいいかもしれない……」

本書は、そんな会話のきっかけづくりのために制作したものです。みなさんのこれからの一歩を、そっと後押しできたら幸いです。

でも、もしかしたら、アートは、
みなさんの悩みを“解決”するものではないかもしれません。
むしろ、その悩みを捉え直したり、解決へ向かう別の道筋を
照らしたりすることを得意としています。

「関係づくり」からはじまり、
課題とともに向き合う仲間を見つけていく。
その特性をいかしながら、実践を重ねていただけたらと思います。

アートプロジェクトは、
たくさんの方がかわりながら動かしていくものです。
つい忙しさに追われ、燃え尽きてしまうこともしばしば……。

一度きりのイベントではなく、持続的な活動をどうつくるのか。
地域で活動が続けるために、運営するチームの関係をどう育むのか。
みんなが集う場をつくり、どう「自分ごとに」していくのか。
これらは、東京アートポイント計画が大切に問い続けてきたテーマです。
そのノウハウや知見は、巻末にまとめた資料に掲載しています。
現場を動かす際の一助として、ぜひご活用ください。

きっと、悩みは尽きません。
それでも、どこかで同じように悩んでいる人がいると知るだけで、
少し心強く、前へ歩みを進めることができるのではないのでしょうか。

本書には東京アートポイント計画の事例だけでなく、
わたしたちが会議などで紹介してきた事例も掲載しました。
それぞれの取り組みが、バトンリレーのように、
次の実践につながっていくことを願っています。

最後に、本書制作にあたって、ご協力をいただいたみなさまに、
この場を借りて、心より御礼申し上げます。

2026年3月 東京アートポイント計画 プログラムオフィサー

アートプロジェクトについてもっと知りたい人へ

東京アートポイント計画は、さまざまなパートナーと連携した事業を実施してきました。その対話から生まれた“ことば”や活動の軌跡は記録に残し、オンラインプラットフォーム (tarl.jp) 上で公開しています。これらの記録には本書に登場した事例や議論の多くが収録されています。ぜひご活用ください。



東京アートポイント計画が、 アートプロジェクトを運営する 「事務局」と話すときのことば。の本 <増補版>

プログラムオフィサーが、さまざまな現場に寄り添うなかで、出会ったキーワードについて執筆した用語集。アートプロジェクトの運営に取り組むときに、一呼吸ついて立ち止まり、自らの状況を確認し、プロジェクトメンバーと課題意識を共有し、対話するためのツールとして55個の“ことば”を収録しています。

2017年発行

https://tarl.jp/archive/2017_06_kotobabon2



これからの文化を「10年単位」で語るために — 東京アートポイント計画 2009-2018 —

東京アートポイント計画の10年の歩みをまとめた一冊。プログラムオフィサーが培った知見をまとめた「中間支援の9の条件」、事業の軌跡を年ごとに振り返った「これまでの歩み 2008→2018」、事業パートナーとの対話を収めた「プロジェクトインタビュー」、これからの10年に向けた展望を語るインタビューやディスカッションなどを収録しています。

2019年発行

https://tarl.jp/archive/artpoint_2009-2018



Artpoint Reports

東京アートポイント計画の1年を振り返りながら、ディレクターとプログラムオフィサーが、ちょっと先の未来について語ったアニュアルレポート。2021年から2025年まで5冊を発行しました。各事業の紹介や注目のニュースのほか、「基礎自治体との連携」「アクセシビリティ」「共生社会」など毎年異なるキーワードから現場の気づきを振り返るインタビューを収録しています。

2021年～2025年発行

https://tarl.jp/archive/ar_2020
https://tarl.jp/archive/ar_2021
https://tarl.jp/archive/ar_2022
https://tarl.jp/archive/ar_2023
https://tarl.jp/archive/ar_2024



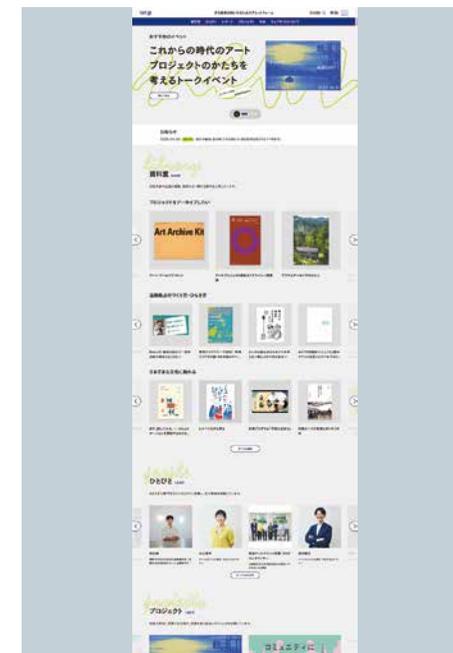
文化事業のためのプラットフォーム「tarl.jp」

地域の多様なパートナーと連携し、プロジェクトを実践し、どのように課題を乗り越えていくのか。さまざまな事例や実践的なノウハウを集めたプラットフォームとしてのウェブサイトです。

運営のノウハウをまとめたテキストや、ツールキット、プロジェクトの記録集など340件を超える資料を公開する「資料室」や、250本以上の「レポート」を閲覧することができます。かかわった「ひとびと」のプロフィールは420人以上を公開。「年表」のページには1000件近い項目を収録しています。

関心のあるキーワードでコンテンツを見つけてみたり、運営の困りごとから役立つ資料を探してみたり、見つけた記事から次の記事へ数珠つなぎにサイト内をめぐってみたり、自由なルートでコンテンツへアクセスできるウェブサイトです。

<https://tarl.jp>



それ、もしかしたら、 アートプロジェクトの出番かも？

さまざまな悩みを“関係性”から見直す事例集

監修 佐藤李青・小山冴子・川満ニキアン（アーツカウンシル東京）

編集 多田智美・白井瞭・鈴木瑠理子（MUESUM）

アートディレクション&デザイン 岸木麻理子

イラスト 堀田りん（MUESUM）

印刷 株式会社山田写真製版所

発行日 2026年3月24日

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス5階

TEL 03-6256-8435

FAX 03-6256-8829

<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

©アーツカウンシル東京

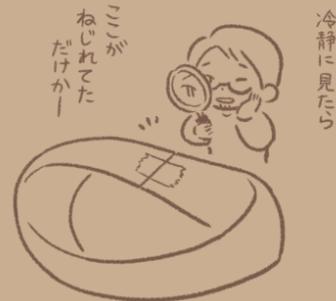
ISBN 978-4-909894-63-2 C0070

営利・非営利問わず、本書のコンテンツを許可なく複製・転用・販売などの二次利用することを禁じます

東京アートポイント計画は、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出す、さまざまな「アートポイント」をつくる事業です。東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、地域社会を担うNPOとともに展開しています。実験的なアートプロジェクトを通して、個人が豊かに生きていくための関係づくりや創造的な活動が生まれる仕組みづくりに取り組んでいます。また、自治体と文化事業を共催する「東京都・区市町村連携事業」を実施しています。

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京





冷静に見たら

ねじりが
だけかー



最後にわたくし
スタッフ係
まいます…

いや、
ネコちゃんの
手柄！

みんなでつくった
広報誌完成！

そりゃバッテリー
減るの早いわってコトかー



アプリ立ち上げっぱ
明るさMAX
背面ライトに
GPSオン…



…という
わけなんです

なるほど
やってみるかー



いっしょに
考えましょ…



弓矢も
いいけど

ほかにもいろいろ
方法あるな！



▲文化振興課 ▲観光課 ▲健康福祉課

これで
連携できそう…



てか、伝説!?

えっ
ツチノコって
めずらしかったの!?